

Re:ゼロから始める異世界生活~希望の剣掲げしサイヤの戦士~

ファイナルスラッシュ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ザマスとの戦いから数年後、マイまでも失ってしまったトランクス。心折れかけた彼に神から世界を救ってほしいという頼みを聞き入れたトランクスは旅立つ！二度と誰も犠牲にしないという信念とHOPEを胸に！

何番煎じになるかわからない、リゼロとドラゴンボールクロス作品です。初作品でまだまだ至らないところ沢山になること間違いなしになるとおもいますがよろしくお願いいたします。

目次

プロローグ	1
未来トランクス プロフィール	4
やって来たぞ異世界！トランクス of 新たな戦いがはじまる！	6

プロローグ

「まさかこんな早く、俺一人になるなんてな……」

西の都を見つめながら青年、トランクスはそう呟き振り返った。

「マイ……」

そこにはつらい時代を共に生き抜いた最後の一人の墓があった。母を、多くの仲間を、そして愛した女性までもを病により彼は失ったのであった。

「父さん、母さん、悟空さん……」

彼の脳裏には、かつて自分の父やそのライバルと共に戦った最後の戦いがよぎっていた。

『俺の力よ！この世界の、人間の盾になれ！みんなの願いをこの一撃に込める！ギャリック砲おおお！！！！』

『これが、ベジットブルー！！』

『ファイナル、かめはめ波ああああ！！！！！！』

『みんなの力を、俺に貸してくれ！』

『貴様の正義など、知ったことか！！』

人々の願いを込めた最後の一撃により人類を滅ぼそうとした神、ザマスを倒したトランクス。しかし、概念のような存在となったザマスにより彼の世界の人類はほぼすべて滅び、なんとかしようとする悟空が呼び出した全王により世界そのものが消滅するというあまりにも惨い結末となってしまったのであった。そして、ザマスが事件を起こす前に封じられたこの世界へと来たのであったが結局自分達が命をかけて守ろうとした世界ではない。覚悟はしていても日に日に心を疲弊していったマイは不治の病にかかり命を落としたのであった。

「俺は……もう……」

トランクスの心はもう折れかけていた。自分が生きている意味はあるのかと……そんなときだった。

「はっ!!!なんだ、この妙な気は!」

自分に向かってくる気を感じ取ったトランクスは身構える。また新たな敵が現れたのかと。しかし、現れたのは。

「な、なんなんだ。この光の玉は。気弾ではない?」

彼の目の前にあるのは宙に浮かんだ光の玉であった。

「…… あなたがトランクスですな?」

「!!なんなんだ、貴様は!なぜ俺の名前を!」

未知の存在が自分のことを知っているという事実には彼は警戒態勢を強めた。

「単刀直入にいます、私は12ある宇宙とはまた別の世界から来た神です。トランクス、あなたには私の世界をすくってほしいのです。」

「…… なぜ俺にそんなことを頼む?俺を知っているのなら父さんたちのことも知っているんだろう?」

「あなたでなければならぬのです、トランクス。人々の願い、希望をその身に宿すことができ、神の世界に立ちつつある貴方でなければ。」

「……」

トランクスは神と名乗る存在に対して警戒せずにはいられないでいた。自分のいた世界はその神によってほろぼされたのであったから。

「私の世界にある神が進入してきたのです、あなたがよく知っているものです。」

「なに!?ま、まさか……………」

「そう、ザマスです。」

驚愕したトランクス。まさか全王によって世界ごと消されたザマスがまだ生きていたことに。

「なぜやつが！よりによつて、なぜザマスが生きている！俺の世界を滅ぼしておきながら、なぜやつが！」

「あなたの怒りはもつともです。お願いします、どうか手を貸して頂けませんか？」

「……………」

彼は、決意した。その折れかけた心を奮い立たせたのであった。

「わかりました、行きましょう。あなたの世界に！」

「トランクス！」

「この世界には俺がいる意味はない。ならば俺の力を必要としている世界を、今度こそ救うだけだ！」

彼は行く。その背にかつて希望と願いを込められた剣を背負って。

未来トランクス プロフィール

未来トランクス

かつて人造人間の事件の際に戦士がほぼ全滅した世界からやって来たパラレルワールドの未来のトランクス。

ザマス、ブラックの一件（未来トランクス編）のあとザマスが事件を起こす前のまた別のパラレルワールドにマイと供に旅立ち二人で暮らしていた。その世界に元々いたトランクスたちには事情を伝えてはいる。パラレルワールドで暮らしてから4年ほどたった頃にマイが精神を疲弊していたこともあり不治の病にかかってしまう。それからさらに二ヶ月後闘病むなしくマイが亡くなり一人きりになってしまったことにより生きる希望を失うが別世界の神からの依頼により異世界へ行くことを決意し旅立った。いつかまた脅威が現れるかもしれないからとマイが倒れるまでは修行に励んでいた。ちなみに容姿はサイヤ人の特徴である若い期間が長いことによる影響であり変わっていないが34歳と思いつきりオッサンである。

変身形態及び技

超サイヤ人

超サイヤ人2（通常）

超サイヤ人2（フルパワー）

漫画版ドラゴンボール超で変身した形態。四年の修行の中で超サイヤ人2のマックスパワーを大幅に伸ばすことができるようになったことで見た目は変わらないが超サイヤ人3並の戦闘力までパワーアップした。元々の超サイヤ人3ほど気や体力の消耗が多い訳ではないので悟空やゴテンクスの物より長期戦闘できるようになっている。

超サイヤ人ブルー（不完全態）

ザマスやブラックとの戦いの中で変身した形態。ブルーになった悟空やベジータとの修行及び共闘により神の気の影響を受けてトランクスの潜在能力が不完全ながら解放されたことにより超サイヤ人

2からより髪の逆立ちが鋭くなり金色のオーラの中心に青いオーラを纏うようになった。当時はブラックたちとある程度戦えるという位であったが現在は修行を重ねたことにより見た目こそ変わらないが悟空が変身した赤い髪を超サイヤ人ゴツドを少しだが上回るほどの能力になっている。

魔閃光

バーニングアタック

ギャリック砲

ファイナルフラッシュ

ファイナルホープフラッシュ

合体ザマスとの最終決戦において発動した必殺技。未来世界で生き残った人々の願いと希望がまつたエネルギーを取り込みその後そのエネルギーをさらに折れた剣に込めることにより気の刀身を作りだした。ベジットブルーでも止めを指しきれなかった合体ザマスを切り裂き倒したトランクスの最強の技。（しかし、ベジットブルーが止めをさせなかったのはブルーに変身していたことにより合体が本来の時間保てなかったのもある。）後に悟空はこの技の事を原理が同じこともあり元気玉に似ていると発言している。

やって来たぞ異世界！トランクスの新たな戦いがはじまる！

「はっ！」

気がつくのとトランクスは街中にいた。しかし、そこは明らかに西の都ではなかった。

「そうか、俺は着いたのか。異世界に……」

そこはまるでおとぎ話や、RPGに出てくるような街並みであった。人々の服装もいかにもそういう物にできそうなものだ。

「おーい、その変わった服装の兄ちゃん。うちのリングガ買っていかないか？」

八百屋であろう店の店主がリングゴと思われる果実を持ってトランク스에話しかけてきた。

「(リングガ？そうか、世界が違えば物の名前も変わってくるのか。)すみません、俺ついさつき田舎からここに来たばかりでお金持ってなくて。それなのにすいませんがお願いしたいことがあるのですが……」

トランク스는その後、店の主人であるカドモンに色々なことを教わった。ここが親竜王国という別名を持つルグニカという国であることやその歴史、半年ほど前にこの国の王や王族にあたるもの達が全て病により死亡した事。新たな王を選ぶ王選が始まること。その話を聞いたトランク스는一つ確信を得た。

「王族全員の死亡……まず間違いないなくザマスが関わっているな。」

カドモンからサービスでもらったリングガを食べ歩きながらトラン

クスは情報を整理していく。この世界に旅立つ前に彼はある程度の情報を神から得てはいた。しかし、神に説明する時間がほとんどなかったことからかなりおおざっぱではあったものの。

(神様からの話では、ザマスが現れたのは確か半年前。直接ではないにしろザマスが何かしら関わっていることは間違いないな。) ぐうううう

(まずいな、マイが亡くなってから食欲がなかったとはいえここ数日ほとんど口にしてなかったのがいけなかったな。まさか準備もほとんどなく飛ばされるとは…… 何にしてもまず食料と寝床を確保しないとな。)

リングを口にして食欲を刺激された体がさらに栄養を求めようと腹を鳴らしてトランクスはまず目先の事をどうにかせねばと考える。元々サイヤ人はあまり燃費がいい方ではなく、ハーフとはいえトランクスも例外ではない。このままでは情けない話行き倒れなんてこともありえる。

「ん？なんだ、この気は？」

トランクスはこちらにかなりのスピードで向かってくる気を感じとるがそれはこの周辺にいる人間たちと少し違和感を感じるようなものであった。

「おーい！そこの兄ちゃんどいてくれー！」

「おっとー！」

トランクスがよけると、そこを金髪の少女が駆け抜けていった。

「わるいな、じゃあなー！」

走り去って行く少女を見つめトランクスは。

「間違いない、今の女の子だ。妙な気の持ち主は。」

「あ、あのー！」

そこにまた今度は銀髪で耳が少しがった少女がトランクスに話しかけてきた。

「すみません、いますばしっこい金髪の子供が来なかったですか!？」

「え？ええ、確か向こうの方に。どうかされたんですか？(なんだ？

この子からも変わった気を。いや、これは…… 気が2つ?)」

トランクスはどういうわけか目の前の少女から気を2つ感じることに疑念を抱いた。

「それが、とつても大切な物を盗まれてしまって。どうしても取り返さないといけないんです！」

「…… そうだったんですか。(さっきの子、盗賊だつということか。)でしたら俺も手伝います。俺にはさっきの子の気配というか、えつーと。まあ、居場所を感じることはできますし。」

「え、手伝ってくれるんですか!? あ、でも会ったばかりの人にそんな……。」

「いえ、気にしないでください。困ったときはお互いさまといただきますから。」

元来正義感が強いトランクスには目の前で困っている人がいるのに見過ごすという選択肢はなかった。

「あ、そうだ。自己紹介してなかったね。俺の名前はトランクスといます。君の名前は？」

「え? あ、えつと…… わ、私は……。」

「エミリア。彼には名乗っても大丈夫なんじゃない? 悪いやつには見えないし。」

突然声が出たかと思うとトランクスの目の前に子猫が現れた。

「うわっ! なな、なんだ?」

「おおー、いい反応だね? 僕は精霊のパック。よろしくねー。」

(そうか、さっき感じたもう一つの気はこの猫のものか。)

「ああ、よろしく。で、君が…… エミリア、でよかったかな?」

「…… へ? あ、うん。私はエミリア。よろしくね。」

(…… 何か訳あり見たいだな。)

「じゃあ、いきましようか?」

「はい、よろしくお願いします」